



# 55周年迎え その先へ

水研はこの4月で創立55周年を迎えた。数々の斬新なアイデアに基づく同社の製品は、国内外で活躍を続けている。55周年を機に、佐藤社長に今後への抱負等を聞いた。

—1の55年間を振り

弊社はこの4月で、創業55周年を迎えました。父がこの会社を立ち上げてから55年が経過したことになります。私が入社したのは平成14年で、その時にはすでに企業としての大枠は出来上がっていましたが、創業当初は社員数も少なかつたでしょうし、できることも限られていましたが、思いました。

水研代表取締役社長 佐藤 康成氏

つたのは、父が水道用の押輪である「ダイホルダード」と「メカホルダード」を開発したことがきっかけです。これらの製品は海外にライセンス輸出されたのが大きな転換点だったのではないかと思います。

それまで押しボルト方式だけしかなかった押輪をクサビ構造とすることで、抜けようとする力を利用して、より頑丈に箇体に食い込むようにして製品でした。この爪の形状がこれまでにない発想でつくられていて、そこに大きな工夫がありました。その後、爪の幅を大きくするなどいろいろと改良が施されました。今では水道事業でのクサビ構造が基本構造になっていますので、押しボルト式からクサビ式に変更したこの製品は、当時としては画期的だったのではないかと思っています。

やはり一つインベーショングリード、時代を変えるようなものをつくらない限り、水研という会社は生き延びられない、という思いがあります。これまで何かしらの新しいアイデアや工夫を取り入れ、そこからヒット商品が生まれ、会社としてステップアップしてきたのではないかと思いません。

いきなり大きな利益を生み出すような製品を開発するのは創業当初の資本力では難しかったのです。そのため、その時代時代の会社の規模でできることを少しづつ積み上げて今につながっていると感じますね。

——会社の取組みの中で、特に印象に残るもののは。

いくつかありますが、一つは可とう伸縮管「フレキベンダー」を昭和55年に開発したことです。

当時、可とう伸縮管の可製だったのですが、フレキベンダーはゴムではなくダクタイル管と同じ材質で、なおかつ可とう部をボール形の構造にして伸縮性を持たせたのが大きな特徴です。

やはり材質が違うと寿命の長さが違うので、取り替えのタイミングに困ったり、強度の問題があつたりするのですが、同じ材質にすることでそいつた課題を解決しました。それでも開発した当初は、なかなか採用していただけなかつたようです。新しい製品や技術は実績がないので、公共事業ではすぐには受け入れてもらえず、国内では苦戦していました。

フレキベンダーが国内で広まつたのは、平成元年に起きたサンフランシスコ地震がきっかけでした。サンフランシスコ市

ではすでに導入実績があり、大きな地震でも離脱・破損していないフレキベンダーを見た日本の水道事業体の方から問い合わせがあったのです。実際に地震後でも機能しているのを見て信頼感が得られたのだと思います。このようにフレキベンダーは海外展開から始まった製品と言えます。海外では実績のない製品でもデータを示せば即採用されます。日本の公共事業に新規参入するのはなかなか難しいのですが、それでも他社とは全く違う発想の商品、独自色のある技術を開発するのは、お客様まである水道事業体にとってもメリットがあると思っています。

た掘削幅の点も、人がいることによってできれば「工事ができる」というところまで改良を重ねて、平成27年に「エスケートEX」を開発しました。穿孔機を短くしてフルモデルチェンジしたことと、施工時間が良く短時間で工事を完了できることが特徴です。「もつと本体をコンパクトにするにはどうすべきか」をテーマに考えた結果の進化です。重機が使えないような場所にも何とか人の手で運べるサイズにおさめました。限られたスペースで、いかに不斷水で施工できるようにしていくかが、私どもの技術開発の根底にあります。

つては、この工場にも採用されています。圧力バラス機構を内蔵していくと水圧をかけても伸びないのが特徴です。免震層配管の動きの中で可動管の中の水の体積が変わらないようにすれば、水管の固定が必要なくなります。取得するのが難しい消防認定も毎年更新しており、今後の展開が待される技術だと思っています。

また、平成29年に大径向けの不斷水バルブ法の新シリーズとして発した「エスゲートB」「I」は、簡易タイプのフライ弁を不斷水で取り扱うというものです。そもそもエスゲートシリーズはエンドミルで管溝状の穴を開け弁体を入れるという工法なのですが、このエスゲートV-Iでもその技術を応用することで本体と施工材が非常にコンパクトト

た。その分工事費用もさく抑えられます。このうに簡易的なバタフライ弁で大口径に参入したとて、新たな選択肢を客さまに提供できるのではないかと自負しています。

——今後の会社運営 当たつての抱負を。

今まででない、新たな使い方を模索し、市場求めているものをいか開発して販売していくが勝負ですね。以前はどう伸縮管がメインでしたが、ここ最近は不断工法が伸びてきており東南アジアなどこれから水道インフラが整備されていく国で、不斷水の場も徐々に増えていくのではないかと考えています。

私が入社した時期は世界全体で公共事業の落込み、設備投資額の減などが続いていたのですが、やつと最近になっ

よ 安 てきていますので、これ  
からは業界全体としても  
会社としてもモードレート  
な成長過程を描いていけ  
ればいいのではないかでし  
ょうか。そのためにも、  
新たな発想の製品や技術  
を考え続けるといつて  
は大変重要ですし、そう  
いった形で社会に貢献で  
きればと思っています。

フレキベンダーを開発  
した頃は対象が新設管で  
けでしたが、不断工法  
は既設の管路を対象にし  
ている技術ですので、ま  
ちづくりが大きく変わる  
中で今後さらに市場は拡  
大していくと考えていま  
すし、新たに開発する製  
品や技術も時代に合わせ  
てどんどん変わっていく  
のではないかと思いま  
す。

今後とも水道インフラ  
を支える企業の一つとし  
て、これまで行ってきた  
独自の発想と工夫を重ね  
た製品開発・技術開発を

新たな成長過程を描く

溝状の穴を開け弁体を挿入するという工法なので、このエスゲートB VIでもその技術を応用することで本体と施工機材が非常にコンパクトとなっています。また設置に当たり、コンクリート防護も不要ですので、工期短縮も可能となりました。私が入社した時期は業界全体で公共事業の落込み、設備投資額の減小などが続いていたのですが、やっと最近になつて伸びつつあるような印象を持っています。水道局などの展示会を見ていくと、も徐々に出展者数が増えていきます。

今後とも水道インフラを支える企業の一つとして、これまで行ってきた独自の発想と工夫を重ねた製品開発・技術開発をさらに発展させ、お客様に必要とされる選択肢を提供し続ける会社でありたいと考えています。